

---

# アレな妹と苦労人の兄のこれまた日常

マーぼー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アレな妹と苦労人の兄のこれまた日常

### 【NNコード】

N1583S

### 【作者名】

マーぼー

### 【あらすじ】

これはかなりアレな妹と、その妹に振り回されて苦労する兄の日常での会話を抜き出したものをそのまま描いたものです。

過度な期待はしないでください。（みなみけ風？）

(前書き)

なんか、前回のが好評だったよつで…。

まあ今回も少しですが、投稿してみました。

もうひとつ、「どうしてこうなった？！神による転生者の輪廻物語」も執筆していますが…少し詰まっています。

すいません。

こちらを気分転換にやっている状態です。  
なので、「どうしてこうなった？！」の方はもう少々お待ちください。

第六十一話

兄「うーん、キーボードが汚れてるなあ」

妹「兄さん、パソコンの掃除ですか？」

兄「ああ、そなんだけど……キーボードの隙間に入った埃を、どうしようかと思って」

妹「ふむふむ、なるほど」

兄「うーん、細長くてモコモコした掃除用具があると便利なんだけどなあ」

妹「兄さん、これで代用できませんか？」

兄「うん無理だね、タポンは掃除するためのものじゃないからね」

第六十一話

妹「うーん……」

兄「どうした妹、悩み事か？」

妹「いえ、」飯の時にですね、兄さんが炊飯器の近くに座った場合  
「…」

兄「うんうん」

妹「いや、兄さんにおかわりをお願いするって、女の子として恥ず  
かしいところが…」

兄「お前が恥じらう方向性に疑問を抱かざるを得ない」

### 第六十三話

妹「でも、女の子としては重要なことなんですよ」

兄「だったら、言い方とかを変えてみたりどうだ? 少しほは違つかも  
しれないぞ」

妹「なるほど、言い方を」

兄「おう、まあ氣休めかもしないけど」

妹「私に、白いのをこいつぱいくださいつー……なんていうのは」

兄「明日から毎日焼き込み」飯にしてやるつか」

#### 第六十四話

兄「どうも寝起きが悪くて困る……何か良い方法は無いかなあ」

妹「田覚ましを変えてみてはどうでしょ?」

兄「田覚ましを?」

妹「ただ音が鳴るものではなくて……」う、携帯を置いて、バイブルーンションの振動で起きるとか」

兄「おお、それは効き田があるかもなー」

妹「はい!でも私の場合、振動でそのまま氣絶しちゃつたりするんですけどね!」 クスクス

兄「携帯を置く場所について話し合ひ必要がありそうだ」

#### 第六十五話

妹「最近の携帯って、アンテナが内蔵されている物がほとんどです  
よね」

兄「そうだな」

妹「あの突起と振動の『ラボレーション』が堪らないの」……」 ギ

リリ

兄「そんな心底悔しそうな顔をされても反応に困るんだが」

第六十六話

兄「おおー、このロボットがっこいー」

妹「懐かしのロボットアニメ特集ですか」

兄「うん…やっぱドリルは男のロマンだな！」

妹「なるほど、兄さんはドリルが好きなんですね」

兄「わりとな…」

妹「なるほど、兄さんは掘る方が好きなんですか」

兄「お前の発言には他意が見え隠れしてるんだが」

第六十七話

兄「なあ妹、俺の枕が見当たらないんだが」

妹「あ、兄さんの枕でしたら、今日お布団と一緒に干しました」

兄「おお、ありがとうございます」

妹「ですが、その後少し染みをつけてしまったので。もう一度洗つて干しておきますね」

兄「待て、何の染みだ」

妹「いや、足ではさんだり擦りつけたり」

兄「いめんやつぱつ説明しないで」

## 第六十八話

妹「兄さん、押入れを整理していたらこんなものが出てきました」

兄「おお、昔使つてた玩具か。懐かしいなあ」

妹「このおままごとセット、覚えてますか?よく一人で遊びましたよね」

兄「よく覚えてるなあ、俺なんかいつすりとした記憶してないのに」「いや、この出で品を見ながら昔を思つて出すところのも、なか

なか良いものですよ」

兄「まあ、確かにそうかもな」

妹「……あつ、おまめ」と使っていたYES・NO枕もじょなど  
ころに」

兄「こんな記憶は思い出したくなかった」

#### 第六十九話

兄「買い物も終わつたし、そろそろ帰るぞ」

妹「そうですね、兄さん」

兄「……言つておくれど、向うにある『AVコーナー』つてい  
うのはオーディオ・ヴィジュアルのことだからな」

妹「もうつ、そのくらい知つてます。バカにしないでください」

兄「それは悪かつた」

妹「まあ、『おもちゃつりば』のコーナーには少し卑猥さを感  
じますけど」

兄「『じつは重症だぜ』

## 第七十話

兄「俺の知り合いに、高所恐怖症の奴がいてな。色々と不便そうだ」

妹「そうなんですか、大変そうですね」

兄「そりゃなんだよ」

妹「もし暗所恐怖症の人と閉所恐怖症の人とが結婚したら、さぞかし大変でしょうね」

兄「なんでまた？」

妹「だつて、真昼間の野外でしか子作りできませんよ」

兄「真剣に悩んでる人に全力で謝れ」

## 第七十一話

妹「胸座と言つたら、服の襟の部分などを指すのが主ですよね」

兄「そりゃんだな」

妹「なのに股座の意味を調べたら、服の部分じゃなくて両腿の間、

股間の「じりじこ」です。これって不思議ですよね

兄「その前に何故『股座』なんて単語を調べよいつて思ったんだ  
お前は」

### 第七十一話

妹「あ、兄さん。リモコン取っちゃ下れこ」

兄「ああ、ほらよ」

妹「あ、違います。テレビのリモコンじゃないですよ」

兄「ん? ああ、HDMIのか」

妹「いえ、そっちでもないですよ」

兄「じゃあ何のリモコンだ」

妹「そこのローーのリモコンだよ」

兄「自分で取ってくれ、お願ひします」

第七十三話

兄「映画館なんて久しぶりだなー」 ヒソヒソ

妹「はい、楽しいですね」 ヒソヒソ

ヴーーーッ、ヴーーーッ……

兄「むむつ」

妹「誰でしょう、マナー違反ですよね」 ヒソヒソ

兄「そうだな、上映中は電源を切つておいてほしいもんだ」 ヒソヒソ

妹「はい。こんな所でバーブの電源を入れっぱなしにならん」 ヒソヒソ

兄「お前、とりあえず映画館出たら説教だからな」 ヒソヒソ

第七十四話

妹「私の学校の先生で、馴熟落ぱっかり言う先生がいるんです」

兄「ほほつ」

妹「面白いなら良いくんですかけど、その……結構、寒いと言いますか

兄「なるほど、滑ってるわけか。馳洒落と言つよりオヤジギャグだな」

妹「そういうんですね、困ったものですね」

兄「ああ、困りものだな」

妹「せめてパロディものの△△のタイトルくらい面白かったら良いんですけど」

兄「ああ、お前の方が困りものだということを忘れてたよ」

### 第七十五話

妹「……ふらり温泉旅」

兄「いいなあ、温泉」

妹「ふらつ……」

兄「？」

妹「……温泉街とはいって、野外で露出して良いものなのでしょうか」

兄「お前の着眼点のズレつぱりは予想の斜め上を行くね」

第七十六話

兄「腹減ったー……あ、ポテトは『サイズでお願いします』

妹「兄さんはファーストフードが好きですよね」

兄「ああ、たまにはジャンクなものも食べたくなるんだ」

妹「私は小食なので、メニュー表を見てるだけでお腹が一杯になります」

兄「やさがにそれは無いだろ？」

妹「とにかく、この『S』や『M』の文字の横に『ド』と書き加えたい衝動を抑えるので精一杯です」

兄「店員さん早く持つてくれ、早くーー！」

第七十七話

兄「うーむ、鼻がムズムズする」

妹「今日は風も強いですか？」

兄「あー、クシャミが……は、ふあ……っ」

妹「はい兄さん、ティッシュです」

兄「あ、ありが……ふあ、ふあつ……」

妹「……」

兄「ふあ、フ 「 ピ――― 」 ックショーン――」

妹「ふう、危なかつたですね。ちゃんと放送禁止用語にはピー音を入れておきましたから」 グツ

兄「何その余計すぎる気遣い」

## 第七十八話

兄「あはは、見ろよこれ」

妹「ふむふむ、『濁音を半濁音にするだけで迫力が半減する』ですか」

兄「ボンバー ンなんかポンパーマンだぜ、めりやくめりや弱そりだよな」 アハハ

妹「ふふつ、そうですね。パイプになっちゃったら全くの別物です

しね 「ウフフ

兄「ああ、まあ、うん。お前がその単語を選ぶのは、まあ予想してたけどね」

### 第七十九話

兄「伏せ字つて重要だよな

妹「そうですね、場によつては死活問題にもなりますし」

兄「うんうん」

妹「でも、使い方によつては事態を悪化させる場合もあるかもしれません」

兄「え? なんで?」

妹「たとえばテニスなんですが、一瞬プレイヤーになつちゃつたら、どんな卑猥な競技をやつていいのかといつて」

兄「そもそもテニスといつ単語に伏せ字を使つ理由が見当たらないんだが」

## 第八十話

兄「妹、今日の学校はどうだった?」

妹「はい、兄さんの話題で持ちきりでした」

兄「な、なんでまた?」

妹「二人で映画を見に行つたとき、クラスメイトが私達を目撃した  
らしく」

兄「ああ、あの時か」

妹「この年頃にしては仲が良い兄妹ということで、羨ましがられましたよ」

兄「なるほどな、まあ羨ましがられるってのは悪い気分じゃない」

妹「はい。それから、私と兄さんがどれほど深く愛し合っているか  
とこう話に発展しまして…」

兄「どうしよう、俺明日から迂闊に出歩けないよ」

## 第八十一話

兄「まだ買い物の途中だが、喉が渴いたな」

妹「あ、そこの自販機で買つてきますよ」

兄「悪いな、頼むよ」

・・・

兄「いくら紙コップ式の自販機だからって、あそこまで慎重に歩か  
なくてさ」

妹「……」 ソロリソロリ

兄「おーい、大丈夫か？」

妹「はい、大丈夫です！……あははっ、やつぱり検尿のカップを持  
つてる人みたいですよね」 ウフフ

兄「いや、そんな想像は微塵もしてなかつたんだけど」

第八十二話

兄「しかし、妹の暴走ぶりには困つたもんだ……せめて、もう少し  
恥じらいを持つて欲しいものだが」

ガラツ

妹「つー?」

兄「なんだ妹、もつ帰つてたのか」

妹「きつ、きやあああつーに、ににつ、兄さんのえつち  
!変態!」

兄「は?」

妹「み、見ないでください、出行つてくださいー兄さんのえつち  
!変態!」

兄「わ、わかつた、出て行くよ」

バタン

兄「……爪を切つてるとこを見られるのは恥ずかしいとか、あいつの羞恥心の基準がわからん」

第八十三話

兄「クイズ番組は良いよな、色んな知識も得られるし」

妹「はい、楽しめて学習もできて、一石二鳥です」

テレビ『では次の問題。ダイエットなどにも利用される、長い時間をかけて酸素を消費し、身体内部に有益な効果を生み出すことのできる運動とは?』

兄「まあ、これは簡単だな」

妹「はい!」

テレビ『はい、正解は有酸素運動でした!』

妹「あれっ、ピストン運動は?」

兄「ちーて次の問題は何かなー」

#### 第八十四話

兄「そういえば、振動で筋肉を鍛えるダイエットマシンがあるよな

妹「はい、ありますね」

兄「あれって、そんなに効き田があるのかなあ」

妹「もうひ、あんなの嘘に決まっているじゃ ないですか」

兄「そつなの？」

妹「振動を与えるだけで鍛えられるのなら、私は今『』不感症にな  
つかやつてますよ」

兄「お前はそれを俺に言つてどいしたいの？」

## 第八十五話

妹「兄さんはソシコミニ体質ですね」

兄「そうしないとお前は暴走しつぱなしだからな」

妹「私の心と体は準備が整つているといふのに、兄さんはいつにな  
つたら私に突っ込んでくれるのでしょつか」

兄「年頃の女の子らしくアンニコイな溜め息を吐いたりしてゐるけど、  
言つてゐることは最低だぞお前」

## 第八十六話

兄「おい、妹よ」

妹「あれ？ 兄さん、お風呂に行つたのでは？」

兄「まやは、あの用途不明なマットを片付けてくれ」

妹「兄さん、もうローションをまいしてしまったんですか？ 転んだりする危険もありますから、ちやんと横になつてから私が……」

兄「片付けひいてんだよ」

## 第八十七話

兄「急にうどんが食べたくなつた」

妹「あ、いいですね。今日のお面はおうどんにしましようか」

兄「いいねー。きつねもいいし、カレーうどんもいいし」

妹「ぶつかけうどんとか」

兄「……」

妹「ぶつかけうどん。おすすめです」

兄「……」

妹「ぶつかけ」

兄「今日の昼はラーメンにしない?」

### 第八十八話

兄「本当にお前は卑猥な発言ばっかりだな」

妹「そんなことはありませんよ。あ、今夜こそ抱いてもらいますか?  
?」

兄「それが卑猥だつて言つてんだよ。とにかくその口を閉じなさい」

妹「ええー」

兄「えー、じゃない

妹「上の口を閉じたとして、下の口はどうすればいいんですか?」

兄「実の兄にする質問じゃないよそれ」

兄「なあ、つかぬ事を聞くんだが」

妹「はい」

兄「その、お前は、そういう卑猥な発言とか、そつちの知識がわりとあるようだが」

妹「もちろん処女ですよ?」

兄「よく臆面も無く言えるな」

妹「でも事実ですから」

兄「そ、そ'か」

妹「ちなみに、ちゅーだつて兄さん以外の人としたことないです」

兄「いや、幼稚園児の頃だら、それ」

妹「いつだらうと関係ありません。私には兄さんだけなんですよ」

兄「……」

妹「とにかく兄さん、お風呂でマットプレイの話に戻るんですけど」

兄「戻らないよ、そんな話はしてなかつたよ。チクショウちょっとシリアルスになつたらこれだよ」

第九十話

妹「うーん……」

兄「お、どうした妹。家計簿とにらめっこして」

妹「いえ、私もそろそろ節約術を身につければ、と思いまして」

兄「ずいぶんと主婦的なことをやるんだな」

妹「いずれ役に立つ」とですから。それで、どこを削れるか考えて  
いたところです」

兄「ふむふむ」

妹「食費、家賃、光熱費、水道代……」

兄「そこら辺は削りにくいくらいだなあ」

妹「通学費、雑費、兄さんのティッシュ代、あとは……」

兄「俺がいつ家計を切迫するほどのティッシュを消費したってんだ」

第九十一話

兄「なあなあ、妹」

妹「何ですか？兄さん」

兄「お前って、ホチキスって言つ？それともホッチキス？」

妹「うーん……私はホッチキスですね。それが何か？」

兄「ああ、学生会の書類で消耗品リストを作らなきゃいけないんだけどさ。どつちの呼び方が正しいのか、わからなくなつちやつて」

妹「なるほど。やつこいつのつて困りますよね」

兄「うんうん、困るよなあ」

妹「私も、たまにイマラチオだつたかイラマチオだつたか忘れちゃいますし」

兄「そんな単語は永遠に忘れたままでいい」

#### 第九十一話

兄「いやあ、ついボーッとしちやつてさ。ローソンで『ファミチキください』って言つちゃつた」

妹「ふふつ、それは恥ずかしいですね」 クスクス

兄「ああ、本当に恥ずかしかつた」

妹「例えるなら、Hな本を普通の雑誌の下に隠してレジに置くはずが、間違えて普通の雑誌の上にHな本を置いてしまった時のような」

兄「微妙にわかりやすいけど、すつじぐく同意したくない」

### 第九十三話

妹「兄さん」

兄「はい、はい、そうです。そこをクリックしてからですね……」

妹「あ、電話中でしたか」

兄「わかつてますつて、先輩が機械音痴なことくらい。はい、そうしたら、次はルーターの設定を……」

妹「……」

・・・

妹「兄さん、そこに座つてください」

兄「なんだ、電話が終わるなり呼び出して」

妹「先ほどの電話。…どなたですか?」

兄「ほら、この間お前も会つただる。学生会でお世話になつてゐる人だよ」

妹「……あんな美人さんに電話でロ ターの使い方を教えるなんて、破廉恥すぎます!」 ビシツ

兄「お前が何を怒つてるのか知らんが、とりあえず最低な勘違いをしていることは確かだぞ」

#### 第九十四話

妹「バ ブは使わない主義です。バイ は使わない主義なんです」

兄「一度も言つた。そして誰もそんなことは聞いてない」

妹「はじめては兄さんのつて決めてますから」

兄「だから聞いてないと言つてゐるのに」

## 第九十五話

兄「あ、今日の味噌汁はいつもと違つたな。ダシを変えたのか？」

妹「いえ、そういうわけでは」

兄「……念のために聞いておくけど、変なものを入れてないだろ？  
な」

妹「当然です。愛情は入れましたけど」

兄「なら良いんだけど」

妹「たつた10グラムで2万円もしたんです、愛情たっぷりですよ」

兄「マジで何を入れた！？」

## 第九十六話

妹「では、最後に衝撃の新事実を」

兄「言つておくけど、『実は血が繋がってない』なんて言われ  
ても騙されないからな」

妹「いえいえ、そんなんじゃないですよ」

兄「じゃあ何だ」

妹「実は、私たちのお父さんとお母さんはですね、入籍してないです」

兄「え? マジで?」

妹「さうに言つなら、子供の頃から、生まれた頃から同じ名字でした」

兄「……え? それって……え?」

妹「えへへー、さすが私たちの両親ですね、兄さん」

兄「ちょっと待て、突然の新事実にパニック寸前なんだが」

妹「大丈夫です、私に任せてくださいー万事うまくいきます!」

兄「何がうまくいくんだよ、もつ……」

妹「ふふつ、兄さん」

兄「な、なんだ?」

妹「えへへ、大好きです」



妹「……なんて、終わると思いましたか？」

兄「いや終わらうぜ、せっかく良い感じに締めたんだからさー。」

妹「良い感じに締めるのは任せてください、骨盤底筋は鍛えてあります！」

兄「だれかこの妹を引き取つてはもらえませんかね！？」

### 第九十七話

兄「おい妹、言いたいことがある」

妹「どうしましたか、兄さん」

兄「まず、俺のパンツを勝手に持つていくな。まあ、これは以前から何回も言つてるけどさ」

妹「大丈夫です、使つたら返しますから」

兄「そういう問題じゃない、あと使つとか言つた。それからな……」

妹「はい?」

兄「俺のベッドの上にパンツを置いていくな。俺にビラシナリって言うんだ」

妹「嗅いだり巻きつけたり、擦ったりしてください」

兄「そんなにわざと要求されちゃうと俺もどうしたらいいかわかんないよ」

#### 第九十八話

妹「和服つていいですよねー」

兄「ああ、いいよな」

妹「下着をつけなくとも許されちゃうんですよ」

兄「俺はどんな理由があれうと許さないよ」

妹「あの、兄さんって肌は弱い方でしたっけ?」

兄「うーん、普通だと思つた」

妹「金属アレルギーなどは?」

兄「無いはずだ。まあ発症したことがないってだけだが」

妹「なるほど、では念のため手錠は革製のものを注文しましょ?」  
兄「なるほど、じゃあ念のためにお前が今読んでる怪しいカタログ  
は没収しておこう」

妹「あ…」

兄「そして言つておくけど、着物の下には襦袢つていう専用の下着  
をつけるんだぞ」

妹「なるほど、襦袢のみがご所望なんですね。わかります」

兄「お前は何一つわかつちゃいないよ」

第九十九話  
妹「うーん、特許を取得するのって難しそうですね」

兄「なんだ妹、何か特許を取れるような発明でもしたのか?」

妹「まだ企画段階ですが、高速振動する自転車のサドルとか」

兄「まず事故が多発しそうだし誰が購入するかもわからないし、何より倫理的にアウトだから断固阻止する」

#### 第一百話

妹「ふと思つたのですが、この家は広すぎます」

兄「何を贅沢な、この広い家を俺たち一人で使えてるんだぞ」

妹「とりあえず、私と兄さんの部屋は共同でいいですよね?」

兄「その時は俺の生活拠点がネカフュに変わるけどな」

#### 第一百一話

兄「うわっ、コーラがシャツに……あーあ、早く洗わないと染みになっちゃうな」

ジャー——バシャバシャ

ガラツ——

妹「兄さんっ！何をしてるんですか！」

兄「え？いや、染みになる前にシャツを」

妹「夢精したパンツなら私が洗いますから。むしろ洗わせてください  
にお願いします！」

兄「いいから出て行つてくれ、お願いしますー。」

## 第一百一話

兄「手が離せない妹に代わつておつかいだ」

兄「えーっと、何を買つんだっけ？メモ、メモつと……」ペラッ

## おかいものメモ

- ・ お醤油
- ・ みりん
- ・ お砂糖
- ・ こんにゃく（温めてもらわなくとも大丈夫ですよ）
- ・ キュウリ（ただお料理に使うだけですよ、それだけですよ）

よろしくお願いします、大好きな兄さん

兄「……」

兄「……さーて買い物だー」 クシャクシャ

### 第一百三話

妹「最近の映画はワンパターンなものが多いですねー」

兄「ふむ、例えば?」

妹「とりあえず恋人の片方が病気になって、鬪病生活を送つて、最終的には死んじゃつて終わりというような」

兄「ああー……確かに、そんなんばっかりかもな」

妹「もつと近親相姦ものを増やしても良いと思つんですけど」

兄「あれ?普通の映画の話じゃなかつたつけ?」

### 第一百四話

妹「兄さん、好きです」

兄「はいはい」

妹「好きです。大好きなんです。愛します、兄さん」

兄「……うん」

妹「世界で一番好きです。私の全てを貰つて欲しいくらい、大好きなんです」

兄「どうしたんだ、急に」

妹「……実は、クラスメイトから兄さん宛てのラブレターを預かりまして」

兄（それで焦つたというか、妬いちやつたってわけか……か、可愛いところもあるじゃないか）

妹「それで、私たちが毎日このように愛を語り合っていると言つたら、いつの間にか噂が学校中に」

兄「フラグへし折るだけじゃ飽き足らず俺の社会的信用まで粉碎するつもりか」

兄「俺が情熱的に応えたらどうするつもりだ」

妹「えつ？情熱的に、って……そ、それは……」

兄「それは？」

妹「……あ、あう、あうあう……」

兄「どうした妹、顔が真っ赤だぞ」

妹「あ、あの、ちょっと部屋に行つてきます。べ、別にナニもしないですよ、情熱的に迫る兄さんを想像したりしてませんから」モジモジ

兄「頼むから、せめて何も言わずに行つてくれないかな」

## 第一百六話

兄「国名の漢字表記つて面白いよな

妹「漢字表記といつと、アメリカは亞米利加……みたいな漢字ですか」

兄「そりそり、そのまま読んだ方が正確に発音できそうだし」

妹「他には阿蘭陀、西班牙、瑞西……」

兄「さすが妹、博識だな」

妹「たしづめ、イングランドは陰真乱奴ですか？」

兄「謝れよ、イングランドの人たちに謝れよー。」

### 第一百七話

兄「うおー、このスリッパあつたけえー。」

妹「新しいスリッパですか？」

兄「うん、今日買つてきたんだ。モコモコして気持ち良いでー。」

妹「わあ、本当ですね。モコモコします。」

兄「一目惚れして、つい買つちゃったんだ」

妹「兄さんは毛深いのが好きなんですね、なるほどなるほど」

兄「買つて早々押入れにしまいたくなつたよ」

## 第一百八話

兄「うーむむむ……むむ」

妹「兄さん、どうしました?」

妹「兄さん、どうしました?」

兄「いやあ、カバンの中でイヤホンのコードが絡まっちゃって」

妹「ああ、ありますよね」

兄「だよな、どうしてこんなに絡まるんだろ?」

妹「はい、ピン ローターのコードもじょつかずつ絡まりますし」

兄「それ以前に持ち歩くなよ」

## 第一百九話

兄「なあ妹、今からスーパー行つてくるけど、何か買ってくるものある?」

妹「えーっと、そうですね……あ、食器用洗剤を買ってきていただけますと助かります」

兄「食器用洗剤ね、わかつた」

妹「界面活性剤が入ってるものをお願いしますね」

兄「ああ、了解」

妹「あ、界面活性剤と言つても海綿体を活性化させるわけではない  
ですよ。ですから別に精力剤では……」

兄「誰もそんなことは聞いてない」

#### 第一百十話

妹「兄さんは健康そのものですね」

兄「おう、風邪すらひかないしな」

妹「体が丈夫なことは良いことです、私も嬉しいですよ」

兄「お前のおかげだよ、ありがとう」

妹「……も、もう一つ、兄さんつたら大袈裟ですよー」 テレテレ

兄（救急箱に備蓄された大量の座薬を見て以来、俺は絶対に病氣にならないと決意したのだった）

(後書き)

「マ「とまあ、今回も少しですが投稿しました。」

劉「「んな妹は…」

マ「中々樂しそ思つよ?」

兄「見てるほうの意見はね…」

劉「だ、だよね~」

マ「ま、まだあと少しきストックはあるんで、もし氣が向いたら投稿  
しようと思いますー!」

兄「じゃ、その時は…こいつらー?」

マ「ん~、……氣が向いたら。」

妹「ではでは~」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1583s/>

---

アレな妹と苦労人の兄のこれまた日常

2011年4月6日02時00分発行